

夕暮れに染まる、そしてひとけのない昇降口にて。

「ねえ、明日、夏祭りに一緒に行けないかしら」

同じタイムミングで靴を履き替えていた南原京子に、じっと目を見つめられながら、急にそんなことを言われた。蝉のけたたましい鳴き声が、より一層やかましく聞こえ始めたような気がした。実際にうるさくなったのはぼくの鼓動だったが、ぼくはこの時それに気付かなかった。

気付く暇もないほどに、ぼくは混乱した。

「……え」

下駄箱から取り出した外履きを手に持ったまま、彼女と目が合う。彼女も同じように下駄箱の前でかたまっている。普段と同じ気丈な目は、やがて逸らされてしまう。歪んだ口端は勘違いでなければ恥ずかしさを感じているようだった。

ぼくは南原のそんな顔を見るのは初めてだった。

深い仲というわけではないけど、ぼくらは決して他人というわけではない。

南原との接点は、同じ中学出身であることと、中学一年から高校三年——つまり今までの六年間、ずっと同クラスであることだけだった。……いや「だけ」というのはどうなのだろうか。今さら思った。

「あなたに、私の浴衣姿を見て欲しいの」

続けられた二の句は目を背けられながら言われた。

「……どうかしら」

三言目は、ちらと遠慮がちに目を向けられながら言われた。

勘違いや思い上がりでなければ、彼女の顔は夕陽を言い訳にできないほどに赤赤としている。

正直なところ、ぼくは南原の性格や在り方にかかなりの好感を抱いていた。

凛々しく、まっすぐでいて、気丈で、誰にも忖度することのないその姿勢は、性差の境なく尊敬に近いものを覚えていた。そのことにはずっと前から自覚できていた。

自覚できていなかったのは、ずっと前から惚れていたということだけだ。

「かわいい……」

意図せずそんな軽薄な言葉が漏れた。

ぼくはそれが自分の口から出た言葉だと気付かなかった。気付いたのは、

「……え?!」

そんな大きな声出せたのか、と思うくらいの声量で南原が驚いた後だった。

「あ……」

「それは……どういう……いいえ、『はい』ってことでいいのかしら……?」

「……喜んで」

浮かんだ言葉をそのまま口にするのはこれからはじめてかもしれない。

気付けばぼくらは青春の真ただ中に立っていた。